小学校の授業における短大生のサポーターとしての参加

― 幼保小連携の為の小大における実践的試み ―

Participation in the elementary lesson as supporter by junior college student

― Practice between elementary school and junior college for the cooperation among kindergarten, nursery school, and elementary school ―

金子　晃之（八戸短期大学幼児保育学科）
石井一二三（八戸市立根城小学校）

要約　本論は、幼保小連携の問題を考えることを目的に、小学校の授業に短大生が参加した実践報告である。最初に「幼保小連携の課題」とそれを本実践においてどのように受け止めたかについて述べる。次に学習指導案の「教材観」、「児童観」、「指導観」、「展開」の内容、評価の規準について述べる。さらに「授業時のサポーターの記録」、「教師の授業進行についての記録」、「実施後の感想」を通して、本実践の意味について結論を述べる。

は　じ　め　に

本論は、青森県八戸市立根城小学校3年3組石井学級の授業に、八戸短期大学幼児保育学科の金子ゼミナールに所属する学生が、授業サポーターとして参加した実践報告である。

本論では、まず今日の幼保小連携の課題を整理する。

次に、その課題を短大生が考える際に、小学校の授業に参加する意図を述べる。

そして、授業参加の準備と当日の流れを報告する。

最後に、授業参加で得られた事柄を、幼保小連携の中に位置づけて結論を述べることにする。

Ⅰ．幼保小連携の課題について

児童の成長や発達を連続するものとして捉えて行くことを意図した幼保小連携の沿革は、昭和46年6月の中教審答申における4、5歳児から小学校低学年までの一貫教育の先導的試行の提唱に遡ることができる。

昭和62年12月教育課程審議会答申では、小学校低学年での生活科の新設が提唱され平成4年から実施された。

さらに平成17年1月の中教審答申では、幼児教育と小学校教育との連携･接続の強化･改善が提唱された。この前後から各市町村教育委員会では、幼保小連携を展開させるようになった。

そして平成20年1月の中教審答申を踏まえる形で平成21年4月から、新しい「幼稚園教育要領」が施行され、平成23年4月から「新学習指導要領･生きる力」が施行され、幼稚園幼児指導要録も改正された。

こうした一連の制度的改革の意図は、生きる力の基礎となる心情・意欲・態度を幼保で十分に育て、生活、国語、音楽、図画工作等の教科のつながりを中心にして、小学校へ円滑に接続することによって、遊びや体験を中心とした教育活動から教科学習が中心となる教育活動への段差を低くすることにある。

Ⅱ．本実践における幼保小連携の課題の受け止め方

これまで述べたような制度的改革の意図を短大生が考えるにあたって本実践では、そうした沿革をゼミでの検討で踏まえた上で話し合いをした。

小学校に通じる心情・意欲・態度を育てるということは何かを掘り下げることや、実際に幼保の五領域の中で実践した内容を参考にした教材と授業づくりを掘り下げることなどが、幼保小連携を考える上で大きな検討課題としてある。しかし小学校の現場を知らない短大生にとっては、経験の域に入らない問題である。

このことを考慮し本ゼミナールでは、まず幼保小連携を考える際、教育実習及び保育実習を一通り経験した短大生が、小学校の授業に参加し児童を支援する中で見えてくる事柄を、経験的に考察することにした。

授業参加は、教育実習及び保育実習を終えた二年生がサポーターとして授業に参加し、サポーターの実践と教師の仕事とをチェックするモニターは、主な実習を今後に控えている一年生が担当した。

そして児童数29名(男子17名、女子12名)の学級をグループに分け（4名グループが6つ、5名グループが1つ)、各グループをサポーターが1名ずつ担当し、その実践をチェックするモニターを1名ずつ配置した。さらに教師の仕事をチェックするモニターを2名配置した。

Ⅲ．学習指導案について

学習指導案は、実施する小学校３年３組担任教諭が組み立てたものをゼミナールで検討し加筆修正する形で作成した。

まず「題材の目標」は、図工の時間に「夢の冷蔵庫」を作成することで、「ドアのように開く画面の仕組みを生かして表したいものを発想し、楽しい冷蔵庫になるように工夫して表すことができる」こととして設定した。

次に、題材の「教材観」「児童観」「指導観」についてである。

（1）教材観

教材にどのような意図が込められているかについてであるが、現行の「新学習指導要領・生きる力」の図画工作の「内容」における「鑑賞」では、「ア　自分の感覚や活動を通して、形や色、組み合わせなどの感じをとらえること」、「イ　形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと」とある。

これと関連させ本時では、簡単な紙のしくみから楽しく発想し、工夫して絵に表すことをねらいとし、それを通して発想することを楽しもうとする意欲、表現したいことに合わせて形・色・位置を考えながら工夫して表す技能を育てることを意図した。

（2）児童観

使用する教材を児童がどのように受け止めるかについてであるが、児童はそれまで、ひまわりを題材とした絵を描くこと、草木を使って昆虫の体を作ること、ポスターを描くこと等の学習に取り組んでいた。

また、この学級の児童は自分の思いや願いを表現することが得意であり、お互いの作品の良さを認め合う活動を取り入れてきたこともあり、自信をもって活動に取り組む態度が強く、図工の時間を楽しみにしている児童が多くいる。

そこで、本時の「夢の冷蔵庫」作りでは、現行の学習指導要領における、これまでの授業で児童が身に付けてきた「表したいことに合わせて材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表し方を考えて表す」といった創造的な表現や、作品の「よさや面白さを感じ取る」といった鑑賞の力を生かした学習活動を展開することを意図した。

（3）指導観

どこにポイントを置いて学習を進めるかについてであるが、自由な発想で冷蔵庫の複数のドアの中身を考えることを軸として、発想することを楽しもうとする意欲、楽しい絵を発想する力を育てることを意図した。

そうした意欲や発想をさらに伸ばす手立てとして、短大生がサポーターとして授業に参加し、手本となる作品を導入の場面で提示し、児童からの質問（工夫や発想についての質問）にサポーターが応答し、作成の過程でもサポーターが助言することとした。

（4）展開について

次に本時の展開についてであるが、全容は巻末資料の通りであり、当日の流れは以下の通りであった。

①サポーターが作成した見本の作品を紹介し鑑賞する。

②作品について児童が感想を述べる。
③特に工夫が施された作品について児童が質問する。
④これから作る作品の「めあて」(ポイント)を確認する。
⑤設計図をもとに児童が自分の作品の軌道修正を行ない、自分の作品を確認する。その際、サポーターが児童の描いた設計図を見守り、児童が描こうとしていることを想像し、それが形になるよう助言を行う。
⑥作品作りを行う。児童は、基本形づくり、絵を描くことに取り組んだ。サポーターは、グループに分かれて、基本形が正しくできているかを見守りながら、自分の考えを作品にうまく表現できずに困っている児童に助言を行った。
⑦作品を鑑賞する。これは、グループ内での発表と鑑賞、グループから代表1名がグループ外に向けての発表と鑑賞とした。その際、サポーターは、作品の発想、配色、構成の特性を理解し、共感的な態度でもって評価することを心がけた。

(5) 学習指導案における評価規準について

教師とサポーターが児童を評価する際には、本時に設定した以下のような「題材の評価規準」に基づいて評価を行った。

［関心］仕組みに興味をもち場面を工夫して絵に表す活動を楽しもうとしている。

［発想］場面が展開し変化すると面白いものや楽しいことなどを思い付いている。

［技術］表したいことに合わせて、形や色、位置などを考えながら工夫して表している。

［鑑賞］作品を友人と見せ合い、よさや面白さ、表現の工夫などをとらえている。

Ⅳ．サポーターの実践に対する記録について

こうしたサポーターによる活動の効果を計るため、また授業そのものを事後に考察するため、本時は①「授業時のサポーターの記録」(モニターによるサポーターの記録であり評価でもあり、あらかじめ設定した3項目に基づいて自由記述とした)、②「教師の授業進行についての記録」(モニターによる担当教師の評価であり、項目を設定せずに自由記述とした)、③「実施後の感想」(サポーター、モニターにかかわりなく記述するもので、項目を設定せずに自由記述とした)を記述し結果を整理した。それは以下の通りである。

(1)「授業時のサポーターの記録」について

a.　記録項目1

「見本作品（サポーターが作成したもの）を見たとき、児童の感想はどのようなものだったのか」

①柄が見えている作品、動く仕掛けがある作品に強い興味を持っていた。
②クイズ形式の作品に強く反応していた。
③サポーターの誰が作った作品かを気にしていた。
④紙の折り方を工夫している作品に強い興味を持っていた。
⑤自分の理想や創作意欲が膨らんでいた。

⑥サポーター作品の折り紙の使い方に驚いていた。
⑦作品を観てさまざまな発想を抱いていた。
⑧サポーター作品の中の、色の濃淡や形の変化に注目していた。

これらからすると、児童は、自分たちに無い技術、工夫、発想に心を惹かれていたことが分かる。

b.　記録項目２

「児童が作品を作る際、児童の発想に対して、サポーターはどのような助言をしていたのか。その助言を、児童はどのように受け止めていたのか。」

①児童が作りたいと思っていることを聞き、初めに何をしたらよいのかを助言していた。
②児童と話すときは姿勢を低くし、顔を近づけ､声がよく聞こえるところまで行き、話す事や様子を見て、困っている感じがしたら自分から話しかけていた。
③綿やフェルトを画用紙に貼るのは、ボンドを指で伸ばして貼るのが良いという助言に対して、児童は納得した様子でそうしていた。
　書こうとする対象について考えた場合、画用紙の色は白が良いと助言していた。
　丸や三角をきれいに切るためには、鉛筆で描いてから切った方がきれいに切れると助言していた。
④子どもが作りたいものをサポーターが適切に把握していた。
　集中できていない児童に対して言葉掛けをして誘導していた。
　集中している児童には、言葉掛けをせず観察していた。
⑤色鉛筆で描いていた設計図から、折り紙を使う考え方を導いていた。
⑥一人一人が工夫している箇所を褒めていた。
⑦変更する箇所を、どのように変えるのかを確認していた。

ここからすると、サポーターは、児童の作業を確認しつつ、技術、工夫、発想という点で助言をしていたことが分かる。

それらに対する児童の反応は、大体以下の２点として現れた。

①サポーターの助言を納得して受け止めていた。
②サポーターに相談し、助言されたことを理解したり納得できたりすると、意欲や集中力が増していた。

このように児童は、初対面のサポーターの助言を受け入れ、作品作りに集中していたことが分かる。

c.　記録項目３

「完成した作品に対して、サポーターはどのような評価をしていたのか。その助言を、児童はどのように受け止めていたのか。」

①工夫、発想を評価していた。
②上手に出来たことを評価していた。
③持ち物を忘れたり、材料が不足したりしていても、気持ちを前向きにして頑張って取り組んだことを評価していた。
④材料の工夫を評価していた。
⑤描いたものの種類の多さ、大きさ、色使いを評価していた。
⑥さらに良くなるような助言をしつつ評価

していた。

⑦同じテーマでも折り紙や綿を使う子どもがいて個性が表れていたことや、サポーターが思いつかない香りや音符を作品に取り入れようとしていた点を評価していた。

これらからするとサポーターは、工夫、発想、色使い、制作姿勢を評価していた。

そして、それらに対する児童の反応は大体次の2点に集約される。

①嬉しそうに受け止めていた。

②次の作品作りも頑張りたいという気持を表していた。

このように児童は、サポーターの評価を受け止め、次の作品作りへの意欲につなげていたことが分かる。

(2)「教師の授業進行についての記録」

この記録では記録の項目を明確に設定することはしなかったが、ゼミナールでの検討の際、以下の3点が記録を録る際の留意点となった。

a. 授業を進める中で、教師はどのような配慮や動きを児童に対して行っていたか。

b. 教師の児童に対する言葉掛けにはどのような工夫や特徴があったか。

c. 教師はどのようにして、児童の思いや考えを引き出したり伸ばしたりしようとしていたか。

これらを念頭に置いた上で当日は次のような点が記録された。括弧内は、「行為の背景にある意図」をゼミナールで話し合い、言葉で言い表したものである。

①「カッコイイ人がたくさんいます」「最後までしゃべっている人は誰かな」というように児童の意識が高まるような言葉掛けをしていた。(自己点検の促し)

②「めあて」を伝えるときに、子どもに考えさせる余地を残しており、子ども中心の授業になっていた。(見通しと進め方の指示)

③一人が褒められると他の子も褒められようとしてクラス全体が良くなっていた。(自己点検の促し)

④一人一人の出来具合を把握し、良く出来ているところをさらに伸ばせるよう、また作品への関心を深められるような言葉掛けをしていた。(共感的支持)

⑤注目してほしい時には「どこのグループが一番最初に静かになるかな」と言葉掛けをしていた。(自己点検の促し)

⑥教師がきちんとした言葉を使っていたので、児童も敬語を使っていた。(生活態度の模倣)

⑦何を描いたらよいか分かるように誘導して、質問していた。(見通しと進め方の指示)

⑧叱ることはせず、作業がきちんと出来ている児童を褒めていた。発表した児童には「すごーい。良く見ていたね」など、一人一人に対してきちんと評価し、良いところを伸ばそうとしていた。(共感的支持)

助言も、「こうしなさい」というような決め付けではなく、「ここは、こうすればどうなるかな?」といったようにポイントだけを助言し考えさせていた。(見通しと進め方の指示)

⑨綿にボンドをつけて貼ろうとしていた児童に対し、紙にボンドを付けてから貼る

方がやりやすいことを伝えていた。また紙をボンドで貼ろうとしていた児童に対して、紙ならば糊でも貼れることを伝えていた。（見通しと進め方の指示）

⑩机の上にいろいろな物があって作品を作るスペースが狭くなっている児童の机上を整理し、スペースを広くする動作と言葉掛けをしていた。（見通しと進め方の指示）

⑪一つの作業が「出来た」といった児童に対し、「次は○○じゃない？」と次の活動を促していた。（見通しと進め方の指示）

⑫グループを回っている間に、活動が早い児童がいたら、「○○さんはもう、一つの扉が出来ています」と友達の進み具合を皆に知らせ、全体に注意を促していた。（自己点検の促し）

⑬残り時間を知らせるとき、「残念なお知らせがあります」と言ったり、残り時間を知らせながら「皆なら出来る」、残り時間が僅かになった時、「1分全力で頑張りなさい」と言葉掛けをしたりしていた。（見通しと進め方の指示）

⑭児童が作った作品に対して否定的なことは言わず、「雲に乗っているのが分かる！」「フワフワ感がいいね」といったような肯定的な言葉掛けをしていた。（共感的支持）

⑮発表しにくそうな児童に対しては、「上手なところをどうぞ」と言葉掛けをしていた。（共感的支持）

このような教師の実践に対する記録をみると、自己点検を促すこと、見通しを持ってどのように進めて行けばよいのかを考えさせたり伝えたりすること、今の姿に共感・支持し次へ進みやすくしてあげること、尊重する態度で接して模倣させること等の4つの項目に整理することができた。これらは教師の「行為の背景にある意図」を整理したものだと言い換えることができる。教師はこれらを常に念頭に置いて実践をしていたのである。

このような教師の実践に対するモニターの感想が「言葉掛け、褒め方、注意の仕方、助言の仕方について学ぶことが出来た」、「教師の言葉掛けにより、完成に近づくように児童が頑張って早く作ろうとしていた」という感想になったのも、教師の動きからすると当然のことであったと言える。

（3）「実施後の感想」

ここで三番目の記録である「実施後の感想」の結果は、大体次のようなものとなった。

①小学校児童の創作意欲は、幼保の幼児よりも、強く具体的であったこと。

②教師による言葉掛け、褒め方、注意の仕方、助言の仕方について学ぶことが出来たこと。

③サポーター（主に2年生）が、適切にサポーターの役割を果たしていたこと。

このような感想から、幼稚園・保育園と小学校とを比較してみると、支援の仕方は基本的に変わらないことを短大生は確認した。

ま　と　め

短大生の実施後の感想は、子どもの意欲を認め、子どもが行おうとしていることを読み取り、行おうとしていることを子ども自身の力でできるよう助言をして、子どもの主体性を伸ばしていくことが支援の仕方だということである。

子どもを支援していく際、教師の役割を深く自覚し、言葉掛け、褒め方、注意の仕方、助言の仕方等についての実践力を付けることの大切さを短大生は経験的に強く感じることになった。

子どもの成長を連続しているものとして捉えるにあたって、本実践の制約の中で短大生が経験として得たのは、子どもに対する言葉掛け、褒め方、注意の仕方、助言の仕方等が教師の実践力として大切なものであるからこそ、特に課題を抱えた子ども一人一人に対する言葉掛け、褒め方、注意の仕方、助言の仕方等の詳細を、幼保から小へ確実に引き継いでいくことが、最も大切で基本的な事なのではないかという感想であった。

実際にこの問題は、幼保小連携の現場の問題として、引継ぎや引き継ぎ事項に対する受け入れ側の姿勢が丁寧であるか粗いものであるかによって、子どもの発達の接続が成功するか失敗するかを左右する点になっていることは周知のとおりである。このことを幼保の職に就く学生が実践を通して経験的に確認できただけでも、今回の試みには意味があったと言える。

今後はさらに、小学校に通じる心情・意欲・態度を育てるということは何かを掘り下げることや、実際に幼保の五領域の中で実践した内容を参考にした教材と授業づくりを掘り下げること等を、幼保と小と大との連携の取り組みの中で考察し、その経験を学生たちに与えられる「場」作りを積み上げて行きたい。

［巻末資料］

第３学年　図画工作科学習指導案

日時　平成 23 年 11 月 30 日（水）5 時間目
場所　八戸市立根城小学校　　3 年 3 組教室
対象　　男子 17 名　女子 12 名　計 29 名
指導者　八戸市立根城小学校　　石井　一二三
　　八戸短期大学　　学生サポーター

１　題材名　ゆめのれいぞう庫

２　題材について

(1) 教材観

本題材は、学習指導要領の「ア　自分の感覚や活動を通して、形や色、組み合わせなどの感じをとらえること」「イ　形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと」と関連する。

本題材は、簡単な紙のしくみから楽しく発想し、工夫して絵に表すことをねらいとしている。そこで、「夢の冷蔵庫」を作る活動を通して、発想することを楽しもうとする意欲と、表したいことに合わせて形や色・位置などを考えながら工夫して表す技能を育てたい。

(2) 児童観

児童はこれまでに、 ひまわりを題材とした絵を描いたり、草木を使って昆虫の体を作ったり、ポスターを描いたりする学習に取り組んできている。また、自分の思いや願いを表現することが得意で、お互いの作品のよさを認め合う活動を取り入れているため、自信をもって活動に取り組み、図工の時間を楽しみにしている子が多い。

そこで、本題材の「夢の冷蔵庫」づくりでは、これまで身につけた「表したいことに合わせて材料や用具の特徴を生かして使うこと」や「表し方を表す」創造的な技能や、「作品のよさや面白さを感じ取る」鑑賞の力を生かした学習活動を展開していきたい。

(3) 指導観

本時では、これまでの活動を生かして画用紙を使い、冷蔵庫を作るという活動を行う。

自由な発想で冷蔵庫の中身を考えることを通して、仕組みをきっかけとして、発想することを楽しもうとする意欲をもたせ、複数のドアがある仕組みの特徴をいかして楽しい絵を発想する力を育てたい。

そのための手立てとして、八戸短期大学の学生さんたちにサポーターとして授業に参加していただき、お手本となる作品を本時の導入の場面で提示してもらい、これからの活動の意欲付けをおこなう。さらに、工夫したことについて聞くことで、これから作ろうとしている作品に関しての見通しをもつことができるようにしたい。

3　題材の目標

ドアのように開く画面の仕組みを生かして表したいものを発想し、楽しい「冷蔵庫」になるように工夫して表すことができる。

4　題材の評価規準

（関）仕組みに興味をもち、場面を工夫して、絵に表す活動を楽しもうとしている。
（想）場面が展開し変化すると面白いものや楽しいことなどを思い付いている。
（技）表したいことに合わせて、形や色、位置などを考えながら工夫して表している。
（鑑）作品を友人と見せ合い、よさや面白さ、表現の工夫などをとらえている。

5　題材の指導計画

時間	目標	学習活動	評価規準
1	作品作りのために見通しを持った設計図作りをすることができる。	冷蔵庫をつくるための設計図作りをする。	かんたんな紙のしくみから楽しく発想し、くふうして絵に表している。
2 3	ドアを開閉しながら様々な発想をすることを楽しみ、「夢の冷蔵庫」を絵に表すことができる。	冷蔵庫づくりをする。	場面の変化や展開の意外さ、楽しさなどを考え、形や色、位置を考え、画面を開閉させて確かめながら工夫して表している。

6　本時の指導（2/3 時間）

(1) 目標　ドアを開閉しながら様々な発想をすることを楽しみ､「夢の冷蔵庫」を絵に表すことができる。

(2) 展開

段階	学習内容と学習活動	指導者のはたらきかけ	サポーター	評価・準備物
導入 (10 分)	1　見本の作品を鑑賞する。		四季・動物・植物などの視点で作った見本の作品を準備する。	教師：画用紙など 児童：クレヨン・パス、水彩用具一式、はさみ、のりなど
	2　感想を発表する。	鑑賞した作品をもとに、感想を発表させる。		
	3　工夫した点について質問する。	これからの作品作りに必要な情報を収集する場となるよう、仕組み・絵の観点にわけてポイントを整理する。	工夫した点について観点に沿ったアドバイスをする。	
展開 (20 分)	4　めあてを確認する。			
	㊙設計図をもとにして夢の冷蔵庫を絵に表そう。			
	5　設計図をもとに、自分の作品の確認をする。	仕組みを理解して複数のドアがある画面となっているか、また、開いたり閉じたりすると面白いものを考えることができたか設計図をもう一度振り返らせる。 冷蔵庫以外のユニークな発想のよさをみつけ、認めながら全体に紹介する。	児童の描いた設計図を見守り、児童が描こうとしていることを想像し、それが形になるよう助言を行う。	
	6　作品作りをする。 ①基本形づくり ②絵を描く ③紹介の仕方を考える	画用紙を配付し、「冷蔵庫の基本形」を作らせる。 開いたり閉じたりすると面白いものを表すために、形や色、配置や貼り付けるものなどを考えながらかいたりつくっているか確認する。また、必要な場合にはアドバイスをする。	グループに分かれて活動のサポートをする。 基本形が正しくできているか、作品を確認する。 自分の考えを作品にうまく表現できずに困っている児童にアドバイスをする。	
まとめ (15 分)	7　作品を鑑賞する。 ①グループごと ②グループから代表１名全体で	自分や友人がつくった作品のドアを開いたり閉じたりしながら見て、よさや面白さを感じ取る。	①に際して、作品の発想、配色、構成の特性を理解し、共感的な態度でもって評価する。	(想)(技) ドアを開閉しながら様々な発想をすることを楽しみ、「夢の冷蔵庫」を形や色、位置を考え、絵に表している 【作品・鑑賞】
	8　片付けをする。			